して、橋寺へ引上、三分一ほど折たりしを、古書より見出し、龍草廬補ひ、通圓茶屋に額にして、古書は文粹か群載たり、

〔道の幸 上〕十八日、〇寛政四年十一月、中略、橋寺、〇中略近きころ礎石に文字有を見つけ、ほり出つゝよく見れば宇治橋の碑也とて、かくて有也といふ、文字は四字づゝ、續て二段三行あり、三段の初一字づゝ、見ゆ、その文は、

洽洽横流　其疾如箭　修　世有釋子　名曰道登　出　卽因徽善　爰發大願

結　以上廿七字あり、全文は帝王編年記に見えたり、然れども扶桑略記には、道登を道昭と書たり、水鏡には宇治橋は道登造れりといひ、編年記には元興寺道登、道昭奉勅造といへり、玄かるを日本紀に玄るされず、續日本紀道昭が傳に、此橋を造るとしるされて、道登が事はさらに聞えざれば、元亨釋書、本朝高僧傳等の書にものせず、いとゞかしきを、此石文の折ながらもかくつたはりて、道登といへる名のあざやかに殘りたるぞ、其功もくちせでいとめでたし、〇略中道登が棟梁にて、道昭は力をあはせしものならんか、

〔都名所圖會 一〕三條橋は東國より平安城に至る喉口なり、〇略中欄干には紫銅の擬寶珠十八本ありて、悉銘を刻、其銘に曰、洛陽三條之橋、至二後代一化度往還人、磐石之礎、入レ地五尋、切石之柱、六十三本、蓋於二日域一石柱濫觴乎、天正十八年庚寅正月日、豐臣初之御代奉增田右衞門尉長盛造レ之、

〔惺窩文集 二〕山州八幡橋本之橋銘

惟地之險、莫レ過二乎江河之大一也、江河之大、莫レ如二乎橋梁之備一也、然則橋梁之備者、守レ土者一日可レ廢レ之哉、前博陸侯、〇豐臣秀吉將レ有レ事二乎大明一、命二諸國一開二道路一作二舟梁一而欲レ得二往還轉運之便一、事絕二古今一、慶傳二遐邇一矣、時哉山州八幡橋本之津、華夷出入之咽喉也、百川之合流、九重之深淵、而黿鼉魚鼈之所レ不レ能レ游也、故行旅數雖レ有二漂溺之患一、竟無二胥謀者一、於是山口玄蕃頭豐臣宗永、奉二鈞命一主二其役一作二長橋一、遠取二材于賀丹之二州一、集二匠氏一設二奇巧一、自同二勞苦一、與レ齊俱入、與レ汨偕出、從二水之道一而不レ爲レ私、脩梁峻址、以架以植矣、其長